



医学をうたうひと 第7回

ガン治療は苦悩との訣別に向かう。

渡邊昌彦

北里大学医学部外科主任教授

一九九二年六月一〇日の手術を、渡邊昌彦教授は克明に記憶している。患者は七八歳の男性、疾患は虫垂炎。通常一時間程度で終える手術に、その日は五時間近くを費やした。「内視鏡外科で盲腸を摘出したんですが、前の年にアメリカで成功例があるだけで、日本では初めてだったんですよ。いわば教科書のない手探りの状態で、とにかく成功はしましたが、もうこんな手術はしたくないなと思いましたね」

その思いは、翌日の回診で真逆に動いた。患者は従来の開腹手術とは比較にならないほど回復していた。病室で新聞を読み、歩くことさえ始めている。前日に手術を終えた老人が、である。多くの患者のためにこの手術を発展させることが、以来、渡邊教授の外科医としての使命になった。「腹部に数ヶ所の穴を開け、そこから内視鏡や鉗子を入れて患部をモニターに映しながら処置をするこの手術は、痛みが少ないぶん、患者さんが受ける身体的ストレスも大幅に軽減されます。まず胆嚢の摘出術として普及したんですが、僕は大腸の専門医として、早期大腸ガンの治療への応用から、この分野でのキャリアをスタートさせたわけです」

大腸ガンの患者数は増加の一途を辿っている。二〇一〇年前後には胃ガンを抜いてトップになるとの推計もある。渡邊教授は内視鏡外科による大腸ガンの治療を七〇〇件以上手掛けてきた。これほどの実績を持つ医師は世界で数人

しかない。例えば大腸の粘膜層にとどまった早期ガンなら一〇〇％治療可能なまでに技術は向上し、現在は進行ガンにも適応が拡大されている。痛みの軽減に加え、拡大視効果によってリンパ節を精緻に取り除けることや骨盤内の様々な神経の温存、さらに術後の癒着性腸閉塞の発生率の低下など、内視鏡外科が患者にもたらす利点は数多い。

「検診システムが整った日本では、海外にはない早期ガンを発見する技術があるし、内視鏡外科の技術も世界一です。その意味で大腸ガンは恐れる病気ではなくなりつつあります。今後は機器の精度もさらに進歩するでしょうし、検査と同じような安心した気持で患者さんが手術に向かい、治療を終えるというのが、僕たちのめざすところなんです」

渡邊教授は各地の病院や大学に足を運び、実際に手術をすることで、自らの技術を若き外科医に伝える活動を続けていく。教育はこの分野の重要な課題でもあるからだ。「ただガンの治療というのは技術だけでは語れない面もあるんです。少し神がかり的な表現になりますが、結局は目の前の患者を救おうという気合いなんです。患者と共に闘おうという姿勢が奇跡を呼ぶことを、ぼくたちの世代は経験的に知っています。諦めたら何も起らないんです」

あの手術の日から一二年、この分野の最前線を走り続けてきた外科医の活力の原点に触れた気がした。